『君の瞳の影』

弓　筆人

〇光と影

「誠に申し上げにくいが、あなたの命はそう長くない…。…覚悟だけはしておいてください…」

折悪しく体調の不良を訴え、ポツポツと小雨そぼ降る早朝に病院を訪れた青年が、延々と待ち時間の続く精密検査の結果、医師から発見された病が既に進行していて『手遅れ』の末期的症状であるという説明をされた後に、最後に重々しく言葉が告げられ、突然の余命宣告に驚く間もなく即日入院を言い渡されて、病院独特の生活感のかけらもない無機質な白い病棟の個室のベッドに就いたのは、雨脚が勢いをつけた昼下がりになろうとする頃だった。

ちょうどその日の事である。

「六号室の患者さんの採血済んだ？」

「はい、今行きます！」

そう言ってナースステーションを飛び出した、病院で働き始めて数ヶ月と経たない研修を終えたばかりの若き看護師が、青年の入院した診療科でひとり立ちし、新たなる人生の一頁〈ページ〉を切り拓こうとしていた。

突如末期の病と人生の終焉を言い渡された死の闇に包まれた青年、これから医療に携わる者として新たなる人生の階段を駆け上がろうとする生の輝きに満ちた女性。

二人は対極的な存在と言えただろう。

しかしどういう運命の悪戯だろうか、これから一人前の看護師としてのスタートを切ろうとする若き看護師の経歴を飾る最初の担当患者に指名されたのは、死を前にした青年だったのである。

「えっ？いきなり私にそんな重い患者さん…無理です…できません。」

若き看護師は、最初は新任である自身にそのような重篤な患者があてがわれた事におおいに戸惑っていたが、看護師長から、

「今流行り病の影響で慢性的な看護師不足になり、あなたに最初から大変な患者さんを任せてしまうことになるけど、きっとあなたなら出来るわ。頑張ってね」

と激励を受け、最初は躊躇〈ためら〉っていたが、

「…わかりました。全力を尽くします…。」

と、遂にはその覚悟を決めた。

こうして逃れられぬ死の運命にある青年と、若き新人看護師の物語が始まったのである。

○目眩まし

若き看護師もある程度は覚悟の上だったが、それにしてもなにもかもがかけ離れた二人の出逢いは最初から衝撃的だった。

彼女が覚えたての病棟の説明をして、用意した必要書類に署名捺印をするように提示し、

「これからあなたの看護をさせていただきます。新人ですが一生懸命頑張ります。この度は大変なご病気に罹られて、お辛いとは想いますが一緒に頑張っていきましょう。お願い致します。」

と、鏡を相手に練習を繰り返した、なるべく無難でナチュラルさを演出した笑顔で幾分たどたどしかったものの丁寧に挨拶したが、青年はなんと、

「なんですか？これから死ぬっていう男にこんな若い女性あてがって、慰めのつもりですか？それとも俺はこれから死ぬけど、あんたはこれから幸せになりますなんていう当てつけですか！？」

と言い放ったのである。

新人看護師は返す言葉を失い、近くに居たベテランの看護師が

「どうしたの？まずは落ち着いて落ち着いて…。」

と、間に入り、青年は頭を掻いて、

「いや、すいません。俺、ちょっといらっと…いや不安定になってつい…すいません…。」

その青年の謝罪に看護師はなにか言葉を返そうとしたが、

「いいから、ナースコールお願い。ここは任せて…。」

と青年と距離を置くよう他用を言いつけられた。

この二人の最初の出逢いでは青年が一方的に悪役〈ヒール〉を演じたと言わざるを得ないかもしれない。

しかしながら青年は青年は避けられぬ死を突如言い渡されて急遽入院することになり狼狽〈ろうばい〉して厭世〈えんせい〉的になっていたし、その青年にとって若き看護師は眩しすぎる存在で青年は一時的にとはいえ酷く混乱してしまったようだった。

○放蕩

最初の挨拶の時からあんな事があったので、ある程度彼女も覚悟はしていたものの、最初彼女は青年にひどく手を焼かされた。

自分が間もなく死ぬ運命だと信じられぬ宣告を受け、迫り来る死の恐怖を一瞬でも忘れたいのだろうか、逃れられぬ死を前にして青年は放埒な生活に走り、病院の規則を無視したのだった。

病院を抜け出して悪友と夜遊びをしたり、監視の目を盗んで煙草を吸ったり、病室で酒を呑んだり、青年の放埒〈ほうらつ〉さは目に余るものがあった。

人生とは実に皮肉に出来ていて不幸な人間ほど快楽に手を染めるものである。
「どうして命を粗末にするような真似をするんですか！？」
若き看護師の心配と怒りの入り混じった叱咤〈しった〉に青年は、
「もうどうやってもあとちょっとで死ぬんだから好きにさせてくださいよ！融通効かせてくださいよ！」
と怒鳴り返し言うことを聞かない。
こうして死を前にした青年と若き看護師の軋轢〈あつれき〉は一ヶ月ほども続いた。
『もうあの患者さん面倒見きれない…。もうとっとと好きに病院出てって勝手に病気で死んじゃえばいいのよ。…って、あの患者さんは死ぬのが怖くて逃げてるだけよ…。何考えてるの私？ああ、だめ！』
情に厚い彼女も言うことをいつまでも聞かない青年を看護することに迷いが出始めたそんな時だった。
その頃病院では携帯ゲーム機との無人島に小さな自分だけの村をつくり動物と戯れ友人と通信で遊ぶことの出来るゲームソフトが入院している子供達の間で流行っていてそのゲームなしには子供達の輪に入れないほどの人気を誇っていた。
そしてその病院には青年が入院するずっと前から重い持病の為生来病弱で長いこと入院生活が続いていた少年がいたのだがその少年はゲーム機もソフトも持っておらず楽しそうにゲームで遊んでいる少年たちの輪を遠くから寂しそうに眺めているだけだった。
看護師はそんな少年を陰ながら心配していてこの日も一人ぼっちになっている少年を見かけて慰めの言葉をかけようとしたが、ちょうどその時偶然近くに居た青年が困ったように頭を掻くと、
「ちょっと待ってろ坊や。」
と言って病室に消えて行き、暫くしてから
「ほら、俺のやるよ。子供たちと一緒に遊んでおいで。」
と伝えると自身の病室から持ってきたゲーム機とソフトを少年にプレゼントしたのだった。
すぐさま少年の母親がとんできて「御返しします。」とやら「御代金を支払わせていただきます」とやら礼を言いながら、混乱したように青年に対応したが青年は再び頭を掻いて、
「いやいいんです。僕は生先〈おいさき〉間もない身ですから。それにこのゲームも気分転換に持っていただけですし…。僕なんかよりこの子に遊んでもらったほうがこのゲームもうれしいでしょう。」
と意に介さなかった。
彼女は遠目からその様子をなにか軽い魔法にでもかけられたかのように眺めていた。

それから一週間ほどしたある日の事である。青年が禁止されていた煙草を吸いに行こうとナースステーションの扉を横切ろうとした瞬間中から声が聞こえてきた。
それは看護師長らしき人物と若き看護師との会話だった。

「私ね、あの青年をこの病院に置いておくのは正直もう限界だと想うの…。あの子は死の病に冒されて同情に値するけど度が過ぎているわ。もう苦情も来ているのよ。彼に退院してもらって家で看取ってもらうようにって私は考えているの。今度の会議で議題に出すわ。」
看護師長は憂鬱そうにしかしながらきっぱりと語った。
しかしその提案に対してうら若き看護師は一瞬その可愛らしいとも美しいともとれる顔面を蒼白にしたが、
「それは待ってください。彼が風紀を守らないのは私に責任があります。彼を強制退院させるなら私にも何らかの処分を加えてください。…そうでなければもう少し時間をください。私が全ての責任を負いますのであの患者さんの看護を私に診させてください。お願いします！」
と力強く告げ頭を下げたのである。
これには婦長も、
「そうねえ、あなたのキャリアで最初の患者さんだし、そんな終わり方したくないわよね。…わかりました。あの青年の件はしばらく私のところでとどめておきます。ちゃんと面倒見て言うこと聞かせるのよ。わかったわね！」
「はい、婦長さんありがとうございます！」
うら若き看護師は安堵と決意の声で感謝を述べた。

この看護師長と若き看護師の一連のやり取りを聞くと青年は頭を掻きむしりうなだれたようにその場を去った。

〇萌芽
例の一連のやり取りを耳にしてそれからというもの、青年は放埒な生活をぴたりとやめて若き新人看護師の指示と指導に素直に従うようになった。
悪友と夜に病棟をそっと抜け出して夜の街へ繰り出すこともなくなったし部屋でこっそり飲酒をすることもなくなり、強いて言えば禁止されている煙草を病院の敷地外にあるひっそりとした公園で日に数本吸う程度の事でありそれは一応禁止されているものの患者の気晴らしとして容認できる許容範囲の事だった。
勿論青年の素行がすこぶる真面目になったことになにより驚いたのは青年を擁護した若き看護師だった。
彼女自身そんなに自分の勘が鋭いとは思ってもいなかったがこれにはうら若き看護師もピンと来た。
『ああ、ひょっとしてあの婦長さんとの会話聞こえていたのね。ああっ、しまったわ…でも、あの人にとってはいい薬になったかも…。確かめたいな…。よし、今度それとなく訊

いてみよう。』

その機会が訪れたのはそれから数日後だった。

「近頃日々の振る舞いがすこぶる真面目になられて素晴らしいです。その調子でお願いしますね。」

青年を処置する機会に彼を褒めて看護師は続けた。

「ただ、そのきっかけっていいますか、なんかありましたか？あの、ひょっとしてなにか聞いていたとか…？」

青年はその言葉を聞くと観念したように、

「…いや実は看護婦さん、俺こないだ俺を強制退院させるとかって会話聴いてしまったんだ。看護婦さん必死に止めてくれてたね。俺、看護婦さんに完全に見放されてると思ってたんだけどな。ありがとう…。」

と応えて礼を述べた。

それに対して看護師は、

「私は看護師として当たり前の事をしただけです。自分の患者さんに責任を負えない看護師は看護師じゃありません。それに…それに、あなたがもし助からないんだとしても私はあなたの病気とあなた御自身に最後まで責任を持ちます。それが私の務めです。」

と、暖かく誠実に応えた。そして、

「それに私あなたが孤独だった少年にゲームをあげるところみてしまったので…あんな優しいところみせられたら見放せないじゃないですかっ！」

と珍しく顔を真っ赤にして言った。

「ああ、あれ看護婦さんにみられてたんだ。いや、参ったなあ…。まあ、ともかく…こちらこそ。最期まで面倒見て下さい。お願いします。」

いつものように頭を掻きながらどこか居心地悪そうに所在なさげに青年は挨拶を返した。

するとその時、看護師は青年がサイドテーブルに置いてある書きかけの原稿用紙と万年筆、そしてノートパソコンに気づいた。

「あっ、すみません…。隠すつもりじゃなかったんですけど言うと面倒かなと想って黙ってたんですけど僕一応物書きで…」

となにか弁解するように言葉を切り出し、

「とは言ってもいつも最終選考止まりで賞を獲った事ないんですけどね…。」

とはにかみながら語ると、

「…今回僕は死の病に罹ってもう駄目だと思って一度は筆を折って無茶苦茶してたんですけどね…。僕みたいなろくでなしを一生懸命庇〈かば〉ってくれる看護婦さんみてたら俺もなにかやらなくちゃって…それでもう一度最期に命を懸けてもう一作書いてみようと想ったんです…。」

とはにかんだように頭を掻いた。

そしてその言葉に、
「御病気も御執筆も一生懸命サポートさせていただきます。お願いします。」
と看護師も心から応援する気持ちで応えたのだった。

この一連の出来事と会話が死の運命にある青年が看護師に厚い信頼を寄せるようになり、看護師もまた青年に心を許すようになる、いわば二人の信頼関係と淡い想いの萌芽だった。

〇交流
慈愛に満ちた看護師の行為は彼を放蕩から現実へと呼び戻し、最期の使命となる小説の執筆と賞への応募へと導いた。
看護師にとっても逃れられぬ死を受け入れて創作に打ち込みながら懸命に生きる青年は、同情の対象であると同時に尊敬の対象でもあった。
だが仄かに惹かれあった二人が互いにより想いを寄せる為には、互いをもっと深く知ることが必要だった。
そしてその機会は間もなくして訪れた。

看護師に時間の許された処置の終わりの事である。
「…どうして作家になりたいんですか？」
看護師は突然青年に問いかけた。
「えっ？」
突然の質問に青年は面食らったようであったが、
「…だから…どうして作家になろうと思ってるんですか？」
看護師はもう一度質問を投げかけた。
「どうしてねえ…？」
青年は自分にも問いかけるように呟いたがその後で、
「もう亡くなってるんですけど僕の親父が国語教師でね…。家には小説やら研究書やらが山のように溢れていたんです。で、僕の親父も本当は国語を教えるんじゃなくて自身が作家になりたかったんです。…だけど家庭の事情でそうも言ってられなくて食ってくために教師になったから…。それでまあお鉢が俺に回ってきたっていうか…。まあ言ってしまえば親父の夢の押し付けですかね…。」
と、問いかけに応え始めた。
「大変でしたよ。子供の頃は…。毎日学校から帰ったらひたすら小説を読まさせられては創作理論を叩き込まれてね…。それが終わったらひたすら作文、作文…。書かされて書かされてねえ…。ほんと嫌になりましたよ。それでいて、俺を怒る時の決り文句は『そんな事じゃ作家にはなれんぞ』ですからねえ。…ったく、誰のおかげで苦労してると想ってる

んだか…。あの馬鹿親父が…。」
青年は愚痴をこぼし看護師は微笑みを浮かべた。
「でもね、文明って言葉あるでしょ。あれはいわゆる文を以て明らかにするという意味でね…。言葉は人間の文化的活動の根幹なんですよ。その言葉を操って世界を創り上げ人の心を揺り動かす…。悪い商売じゃないでしょ？」
「素敵だと想います！」
看護師は感激したように応えた。
「…さあ僕の事はこれくらいでいいでしょう。看護婦さんの事も聞かせてください。なぜ今の御職業を志されたんですか？」
青年も彼女になぜ看護師になったのか尋ねた。
「えっ？私ですか…。私はそんなうまく説明出来ないし…。」
看護師は羞ずかしがったが、
「素直に応えてくれればそれで十分ですよ。上手い下手なんてありません。」
「じゃあ…私は…」
彼女も青年に背中を押されて語り始めた。
「私は幼稚園からずっと一緒だった幼馴染がいたんです。優しい子で頑張り屋さんで…。お互いに気心の知れた苦しいことも楽しいことも一緒に体験した親友だったんです。だけどその子高校生の時に白血病に罹って…。若くして亡くなってしまったんです…。私は親友を救えなかった自分の無力さが嫌になって、その子のような不幸な患者を一人でも救う手助けになりたいと想って看護の道を歩んだんです…。」
「そうでしたか…。」
青年は聞き入っていたが、
「看護婦さん、でも看護婦さんはもうとっくに志を叶えたんじゃないですかね…。」
そう続けた。
「看護婦さんは僕を放蕩の道から救って人生最期の大仕事へと導いてくださいましたよ。やけになって寿命の無駄遣いしてたんですけどね…。看護婦さんに目を醒まさされたようなもんです。夜の街で寿命を使い果たしちゃうところでした。僕の命の恩人ですよ。」
そう言うと珍しく青年はいたずらっぽく笑顔をみせた。
「もう、あの時は大変だったんですからね。もう面倒かけないでくださいよ。もう…」
始めてみせた青年の笑顔へのときめきを悟られていないかどうか、恥ずかしまぎれに看護師は言葉を返した。
その時看護師の職務用の携帯電話が音を立てた。
「あっ、ナースコールだ。私行かなきゃ…。」
「行ってらっしゃい。僕も公募の締め切りがあるから…。また今度機会がある時ゆっくり語り合いましょう。」
「はい。それでは…。」

それから二人の心の交流の灯火がつき、その炎はゆっくりとしかし着実に熱を帯びていった。

こうして処置の回数やナースコールの鳴る音が重なる度に二人は少しずつ、しかし確実に仲睦まじくなっていった。
若者は自分の小説に懸ける熱い想いや自身の内に秘めた心を看護師が受け入れてくれたことに感謝し、一方彼女はそんな青年を看護する事が自らの生きる糧となっていった。
そしてついには青年は彼女が自分の血圧を測ったり脈を測ったりしていてくれるだけで満ち足りた気分になるようになったし、彼女もただ青年がひたすら万年筆で原稿用紙にカリカリと書き込みを続け、キーボードをカタカタと小気味よく鳴らす、その側にいるだけでなんとなく幸せな心地になっていった。

〇破局点〈カタストロフ〉
こうして二人は信頼と相互理解、そしてそこから滲み出る淡い想いを育み、青年はその間も着実に小説執筆に取り組んでいた。
そして夜明けのない朝はない。
公募の締切の間近に近づいた、ある晴れた心地いい朝だった。
早朝看護師が青年の検温に訪れると、青年はベッドに原稿用紙を散乱しノートパソコンを睨んでいたが、明らかに徹夜した人独特の血走ったギラついた目で看護師に目をやると、
「出来た…。」
と蒼白い表情で小さく語った。
その言葉に看護師は、
「うん…。」
と返すと、その後特例として病院のプリンターを使って原稿を印刷することが許可され、その日の午後担当看護師が伴ってという条件つきで近くの郵便局へ通う外出許可が出された。
全ては執筆に疲れた青年が仮眠している最中に、青年の頼みを受けていた彼女がてきぱきと内助の功を発揮し手配しての事だった。

「お参りしていこっか…。」
そう言い出したのは彼女だった。病院から郵便局へ向かう途中を入ったところにこじんまりとした神社があるのを知っていたのである。
外出用に入院時と同じお決まりのスラックスと素肌にワイシャツ、ジャケットに着替えた青年と真白なワンピースにピンクがかったベージュのカーディガンをあわせた（外出が決

まると彼女はこの服を、なんとわざわざ昼休みに家まで走って取りに出掛けたのだ…！）
彼女草木に覆われた幽玄な石畳の参道を通り鳥居をくぐると厳かな拝殿へと辿り着き、看護師は財布に入っていた五百円硬貨、青年は、
「ええい、ままよ！」
と叫ぶと【福沢諭吉】の札を賽銭箱に投げ入れると二人手を添え鈴緒を鳴らしてそれぞれに祈りを込めた。
『俺はもうやり遂げた。賞の事はもうどうでもいい。俺が死んでも彼女が幸せになりますように…。』
青年は彼女の幸せを願い、
『私の寿命が半分になったって、あと一年になったっていい…。その分彼を長生きさせて…。』
彼女は青年の命長からんことを願った。
想いを寄せあう二人のいと清らかなることよ。
こうして二人は神社での礼拝の後、郵便局で無事ポストに原稿の入った封筒をいれると、お互いを支え合い、連理の枝のように病院への帰途についたのだった。

こうした穏やかな幸せは永遠に続くように私達に錯覚させるが、しかし破局点〈カタストロフ〉は得てして突然訪れるものである。
コンビニエンスストアの角を曲がり病院が見えた時、青年は一服したいと言い出し、彼女はコクリと頷くと、コンビニで珈琲とお茶を買い、病院の近くにある公園で、看護師はブランコに座って青年が缶珈琲を手に立ち尽くし大気を深呼吸して紫煙をくゆらせる様子を幸せそうに眺めていた。
だがその時である。
青年が突如ガタッと崩れ落ちたのである。
彼女にはその崩れ落ちる青年と飛び散り地を這った血の如き珈琲の様子がアニメーションのコマ送りの様に鮮烈に目に焼きついた。

それから間もなく病棟にストレッチャーの車輪の音が鳴り響き、それから間もなく病衣に着替えさせられた青年は病室のベッドに横たわっていた。
やはり彼が締切に追われ、執筆に明け暮れていた間も病魔は着実に彼の身体を蝕んでいたのである。
駆けつけた医師から以後ベッド上で安静にして生活するように、と白衣に着替える間もなく青年を介抱した彼女に指示が出され医師は足早にその場を後にした。

「煙草吸えなくなっちゃったな…。数少ない愉しみだったんだけど…」
頭を掻き、ちょっとはにかみながら青年は看護師に語りかけた。

「そんなことより御身体大事になさってください。先生の仰る通りしばらくベッド上で安静ですよ。」
若き看護師は優しく青年に語りかけ、ベッドに寄りかかっていた青年の背中を軽くさすったが、突如としてその背中がわなわなと震え出した。
「…看護婦さん…看護婦さん…俺…やっぱ死んじゃうんだね…」
青年の呻き声はやがて慟哭の嗚咽へと変わり、
「看護婦さん…やっぱ俺…死にたくねえよ…こんなところで死にたくねえよ…賞獲るまで死ねねえよ…！作家になるまで死ねねえよ…！」
看護師と二人だけの病室を埋め尽くした。
「大丈夫…私がついているから…大丈夫…大丈夫…。」
そう語りかけると看護師は病室のサイドテーブルに突っ伏した青年の背中を抱きしめ優しく優しく語りかけた…。
青年の背中を抱くことなど看護師として許されたことではなかったが彼女にはこうすることしか出来なかった。
『どうしよう…？どうしよう…？この人…。どうしよう…？どうしよう…？私も…。』
看護師は自分を問い詰めながら青年の慟哭が収まるまでずっと内面の荒波を抑えながら穏やかに慰めの言葉を投げかけずっとその背中を抱擁していた…。

〇瞳の影
それから一週間ほど…、
青年の容態はひとまず落ち着き、青年は小説を執筆していた時とは打って変わってひっそりと日々を過ごしていた。
『この人とこんな時が永遠に続けばいいんだがな…しかし俺は死ぬ…それが運命だ…受け入れようと受け入れまいと…』
青年は残された力で死すべき自らの運命への覚悟とむきあっていた。
一方青年の傍らで彼の身の回りの世話をしていた彼女も、
『いけない…、私達は一線をこえてはいけない。それはわかっている。でも、一分でもいい、一秒でもいい、もっとこの人のそばにいたい…。とにかく時間がない…。』
自らに押し寄せる混沌とした感情の嵐と闘っていた。

この時、二人は恋人のように親密に寄り添っていたが患者と看護師としての仲をこえるものでも決してなかった。そして二人にはそんな関係が心地よかったし、それ以上の関係になることもそれ以下の関係になる事もできなかった。
まだ二人は若く未熟で弱かったと言わざるを得ないのかも知れない。

そして時の流れは残酷だった。

青年の容態が悪化したのだ…。

「大丈夫…きっとよくなるから…。」

病院の個室で二人、看護師は青年を介抱しながら語った。

「看護婦さん…御願いがあります。」

病にやつれながら青年は言った。

「はい…。」

一呼吸して覚悟を決めたように看護師は応えた。

「看護婦さん…僕が死んだら…僕の代わりに賞を獲れたかどうか見届けてください…。」

青年は残された僅かな力を振り絞り、看護師はコクリと頷いた。

「…君が僕の瞳になってください…。」

それから数日後青年はこの世を去った。

この物語の最後は彼女の瞳が青年の作品が賞を授かったかどうか見届けるところで終わるべきかも知れないが、それを知ろうというのも野暮であろう。

彼女の無垢に研ぎ澄まされた瞳とそこに宿る青年の影、それが応えである。